Fine Artsから美術へ
——アジアにおける概念と語彙の流通

森　仁史

本誌四十六号で、日本の国語辞典に「美術」がどのように登場したかを検討したが、これには中国における英華字典の先例があることに気づいた。日本の近代国語辞典の編纂出版は一八九〇年代以降になるのだが、これに先駆けて、一八六〇年代末から七〇年代にかけて英語字典の編纂が中国で進められていた。とくに明治維新と重なるように一八六六年から六九年にかけて、イギリス政府の援助も得て香港で刊行されたW・ロブシャイドによる四巻本English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciationは広い収録語彙とロブシャイドの中国文化への造詣の深さが手伝って的確な語釈であったため、影響力が大きかった。これ以外にも、W・H・メドハーストが一八三〇年に英和・和英辞典をバタヴィアで出版し、一八四七年に上海で二巻本の英華辞書も出版している。今回はまず岩崎克己『柴田昌吉伝』（昭和十年）と豊田實『日本英学史の研究』（昭和十四年）の先学を手掛かりに、その成立事情をたどってみたい。

一八五八年日米修好通商条約締結の年に幕府は長崎に英学伝習所を設けた。アメリカ合衆国、イギリスが交渉相手として重要になったため、外交交渉に英語が不可欠となったからだった。この教授何礼之（一八四〇—一九二三）は唐通詞を父とし、長崎来航の中国人から、メドハーストの英華辞書も入手したという。五七年江戸に蕃書調所（六二年洋学調所、六三年開成所）が設置されていたが、英学教育は英語句読教授出役に竹原勇二郎、千村五郎が配属された六〇年八月が最初であり、同年十二月に堀達之助（一八二三—九四）が教授手伝を命ぜられている。堀も長崎の蘭通詞の出身であったが、アメリカから来航したビッドル使節（一八四六年）の通訳、ペリー使節（一八五三年）の首席通訳を務めた。幕政期には通詞は町人身分であり、堀は蕃書調所教授となって初めて士分となった〔図1〕。堀は一八五五年交渉の節にはペリー使節の通訳官として来日したロブシャイドと条文確認作業をともにし、メドハーストの辞書（静岡県立中央図書館葵文庫蔵）を贈られている。一八六〇年頃より堀、千村、竹原に西周助、箕作貞一郎らが加わった調所スタッフは一八五七年オランダで発行されたポケット蘭英・英蘭辞書を下敷きに、英和辞書編纂に着手し、六二年に『英和対訳袖珍辞書』（一万七千〜二万語収録、以下堀辞書）を完成させ、同所から出版した。このとき英文字は鉛活字で、邦文訳語（漢字、カタカナ）は木版で組み、洋紙に両面印刷で二〇〇部印刷した。しかし、需要が大きく、六六年一月に堀越亀之助が主任となり、堀や柳河春三、田中芳男らが校訂に参加し、『改訂増補英和対訳袖珍辞書』一〇〇〇部が再版された。この版には収録語には増補はほとんどないが、訳語は大幅に改定された。さらに一八六七年にこの再販第二刷（同所か）、六九年第三刷（蔵田屋）が刊行されており、いかに本書の需要が大きかったが伺える。これらはすべての版面を木版で起こし、袋とじの和装本として出版された。我が金沢にもこの第三刷が伝わっており、扉に「加州海軍局文庫印章」の印が押されている〔図2〕。さらに一八六九年と七一年に何の弟子だった薩摩藩士高橋新吉が前田献吉とともにこの辞書にいくらか加除訂正を加え、判型は縦長の洋装本としたのが『和譯英辞典』（いわゆる薩摩辞書）である。これ以降出版された新井郁（一八七二年）や岸田吟香（一八七三年）はこの薩摩辞書の翻案であった。

1　ポートマン筆応接所　手前に平伏しているのが堀達之助（堀孝彦『開国と英和辞書—評伝・堀達之助』より）

縦書きしか知らなかった日本人が横書きの英語との併用を実現しようと苦慮した結果がこの辞書の独特な版組に表れている。全体を横帳の規格（再販第二刷　横一九・一×縦一五・八センチ）とし、英文の横組みを基本として、それに縦組み邦文を混在させて排列している。このスタイルはこれに続く柴田の辞書でも、二十五年後の一八八七年に和洋とも活字で印刷された『英和字海』でも踏襲されており、影響が大きかったようである。ロブシャイドは漢字も横組みとしており、全体を英文の組に従わせたのだが、日本の辞書編纂者は邦文の組み方を横にすることには踏み切れなかったらしい。この初版草稿と改訂増補版のための原稿が二〇〇七年名雲書店によって発見され、影印本が刊行されている。これを始め、堀達之助については堀孝彦によってきわめて闊達に資料発掘と検証が進められている。

堀たちの依拠した原本がそもそも簡易な辞書であったので、ここにはfine artsの登載はない。最初にこれを記述したのは一八七三年一月に出版された『付音挿図英和字彙』（約五万五千語収録、以下柴田辞書）で、これは当時外務省中訳官を務めていた柴田昌吉（一八四一―一九〇一）と子安峻（一八三六―九八）が編纂したのであった。これは一五四八ページに及ぶ洋装ハードカバー本（二五・三×一九・〇センチ）であった。この辞書にはかなりの挿図が添えられているが、これは東京の小林東馬が彫った。一部しか確認できていないが、挿図もオグルヴィ辞書から写している。同書は数千部を売り上げ、ここに「The fine arts　四術（詩、楽、画、彫像）」（図3）が登載されている。柴田も長崎通詞の出身で、一八六六年に初めて久留米藩より扶持を給与された。柴田が長崎洋学伝習所で指導を受けたのが一八六三年十月長崎に再来日（一八五九年初来日）したG・F・ヴァーベック（フルベッキ）Verbeckであったが、彼はこのときは上海から日本に渡航したのである。柴田は六七年三月済美館教授に任ぜられ、同年海軍伝習所で英国海軍軍人の通訳となるため上京した。この期間、何とも同僚であった。六九年英学校教授、外務省中訳官に任ぜられ、翌七〇年から林道三郎、柳谷謙太郎と「英国法律博士阿日耳維（J. Ogilvie を指す）氏ノ字彙ヲ原本トシテ庚午ノ年始テ稿ヲ起シ公務ノ余暇ヲ偸ミ共ニ対訳ヲ勉ム」るようになったことを辞書序文に書き残している。オグルヴィはスコットランドのアバディーン大学出身の辞書編纂者なので、あるいは工部大学校のお雇い外国人教師の誰かがその辞書を持参したのかもしれない。だが、このほかに当然前記のロブシャイドも参照したと考えるべきだと思われる。また、これらの政府官僚の仕事とは別に、一八五九年来日したヘボンは六六年に和英辞書の原稿を完成させ、岸田吟香と上海に渡り、翌一八六七年に『和英語林集成』を出版した。この巻末に英和語彙（図4）が付属している。

なお、柴田は一八七七年末頃に外務省を辞したが、それは耳が遠くなり職務に堪

2 『改訂増補英和対訳袖珍辞書』扉
（石川県立図書館蔵）

3 『付音挿図英和時彙』fine art の項（金沢大学附属図書館蔵）

4 ヘボン『和英語林集成』art の項

えられなくなったためだった。その後は辞書改定に全力を傾注し、第二版が発行された一八八二年五月には長崎に転居していた。さらにその後、八七年五月に再販を刊行している。

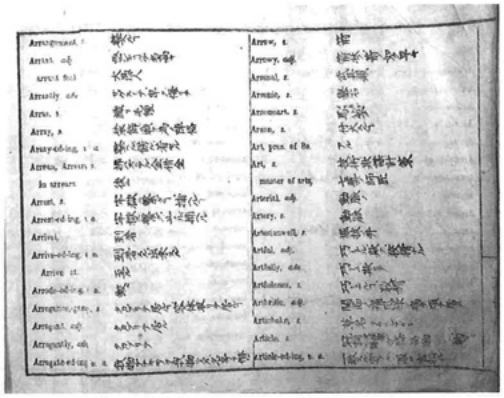
ロブシャイトの辞書は一八七二年一二月に津田仙、柳沢信大、大井鎌吉が翻訳に着手し、全巻が刊行された一〇年後の一八七九年に、抜粋して二巻本として翻訳、出版した。森岡賢二の研究によれば、彼らの翻訳はむしろ編集に近く、複数の中国語訳語を日本語では一つにまとめたり、別な日本語を挿入してもいた。この作業には、柴田辞書や吉田賢輔『英和字典』（一八七二年）を参照した形跡がうかがえるとのことである。また、一八八三年にロブシャイドの和訳本第二版が井上哲次郎の校訂によって発行されている。いずれも、中国での先行業績を日本の知識人たちは大いに参考にしようとしていることを示している。いずれにしても、中国語の方が英語語彙の移植については、日本語よりもはるかに大量の成果で先んじていたことは確かである。

これらの英語を十九世紀後半の日本でどうやって印刷するかは大問題であった。一八五七年一月蕃書調所にオランダ語活字製作が下命され、翌年三月市川兼恭らはオランダ献上の印刷機を使って、「活字之小冊子始而落成」したところであり、邦文活字はなかった。こうした事情のため、横浜からでもわずか五日の航海で着ける上海で印刷するほうがたやすかったし、幾人もがこの方法を選んでいる。ヘボンの辞書ばかりでなく堀辞書の再版に等しい『和譯英字典』も同じアメリカ・プレスビテリアン・ミッション印刷所（美華書院）で印刷されている。最初に日本で印刷されたのは柴田辞書であり、この印刷所の横浜日就社とは柴田と子安が辞書刊行のために二人で元弁天町に起こした会社なのだ。彼らは横浜の繊維問屋平八から無担保で資金提供を受け、一八七〇年に上海から活版印刷機を輸入し、同社が長崎で鋳造された本木昌造の邦文活字を入手したのは翌七一年十一月であった。こうした連関をみると、高杉晋作（一八六二年）ばかりでなく、高橋由一（一八六七年）、納富介次郎（一八七〇年）ら関係者の上海体験の意味もさらに検討すべきように思える。

これらの辞書における美術関連の訳語を比較すると次のようになっている。

刊行年	編者	art	fine arts
一八六六	ロブシャイド	手芸、技芸、芸業、事業、法術、工芸	六芸、四術、技芸、可愛
一八六六	堀達之助ほか	技術、詐謀、計策	なし
一八六七	ヘボン	ジュツ、ゲイジュツ：タクミ、ノー、コー、トク	なし
一八七三	柴田昌吉、子安峻	嚮、手芸、技倆、計策、詐偽、職業、機巧	四術（詩、楽、画、彫像）
一八七九	中村敬宇校正、津田仙、柳澤信大、大井鎌吉訳	手芸、技芸、芸業、事業、法術、技術、技倆、工芸	六芸、四術、技芸、ウツクシキゲイ（詩楽画等の術ヲ云）

artはどの辞書にも登載されているが、芸術、美術の語義はほぼ見られない。唯一ヘボンが芸術を訳語の一つに挙げているが、この時期なら「卜祝筮匠の技」（『大漢和辞典』）と解すべきように思われる。共通しているのは特定の技能、技術を指していることである。従って、craftの語義にかなり近くなっている。ヘボンは技術としての語義と巧みさを表す抽象的な語義とを区別しようとしている。堀辞書ではartの見出しの次にMaster of artsを付け加え、「七芸ノ師匠」と語釈している〔図5〕。七芸はliberal artsを指し、その語義は「性理学、文学、詩学、度学、画術、彫物学」と記しているが、正統的なリベラル・アー



5 『改訂増補英和対訳袖珍辞書』artの項（石川県立図書館蔵）

ツの定義と微妙に異なっている。

fine artis の訳語では、美術ないし芸術の語義であることが明確となっている。ロブシャイドは fine art を翻訳するに際して、「六芸」と「四術」を訳語として当てている〔図6〕。中国古典にも通じていたロプシャイトは意図して中国における芸術概念を踏まえて意訳したのだとすべきだろう。実際のヨーロッパにおける美術のジャンル、すなわち絵画、彫刻、建築とは無関係に、fine art を中国における芸術概念に対応させることによって、美術の語が帯びている形而上の意味を伝えようとしたのだ。六芸とは『周礼』に記された「礼、楽、射、御、書、数」（art の項で記述）であり、四術は『礼記』に記された「詩・書・礼・楽」であることを承知のうえで、この訳語を当てているのである。漢籍を承知している日本人ならば、それらの意味していることは常識に属していたはずだ。

それを踏まえたうえで、柴田が四術をわざわざその内容をあげて「詩、楽、画、彫像」として記述していることに注目しなければならない。これは中国古典の定義と異なる四術であることを示そうとしているとみることができる。また前出のリベラル・アーツとも異なる。柴田が言及したオギリヴィは四巻本の The Imperial Dictionary, English, Technological, and Scientific.... 1855 を編纂したのち、これを基に幾つもの簡約版を発行している。このため、柴田が参照としたとしているオギリヴィの辞書がどれなのかは判然としないが、再版改定後に参照しようとしたのは Comprehensive English Dictionary, 1863 であったという。筆者は一九五五年発行の辞書を参照することができたので、これとの比較を示しておこう。fine art にはかなり詳細な記述〔図7〕がなされている。とくに芸術が「目によって我々に訴える再現芸術」、視覚美術に傾いていた十九世紀半ばの西洋美学の動向が反映されている。オギリヴィは具体的な領域としては「詩、音楽、絵画、彫刻」を挙げており、柴田の例示はこれと全く重っている。従って、柴田は中国古典をあえて無視して、これを引き写しているとせねばならない。

一八七一年ロンドンで International Exhibition of works of Fine Art and Industries が開催され、日本に通知された。野呂田純一の調査によれば、外務省訳官はこのとき初めて Fine art を訳したのだが、これを「技芸」あるいは「精美なる細工物」と訳した。この時までに流布していた堀辞書には fine art の見出しはなかったが、前者の訳語は art の英語としての一般的な語義に従ったものであり、ロブシャイドの art の語義にも登場している。後者は fine の「美ナル、清キ、鋭キ、立派ナル、細カキ、薄キ」の語釈に art の語義を組み合わせたのであろう。つまり、外務省翻訳官は美術とは念入りに製作されたものと受け止めたことが分かる。イギリス政府の作成した同博出品分類はこの下位分類を絵画、彫刻、版画、建築、染織などとしているのだから、彼らが工芸品のなかの上手物を想像したのに違いない。次に一八七六年フィラデルフィア万博の一般規則の翻訳に際して、外務省が四術〈詩、書、画、彫像〉と訳

FIN (82

Tsz mái chí tung sí, 自買之器具 tsz' 'mái ,chí hí' kū'. Tsz mái chí k'í kū.
Fine, small, minute, 幼 yau'. Yú, 細 sai'. Sí, 幼細 yau' sai'. Yú sí, 細微 sai' ,mí. Sí wí, 精靈 ,tseng ,ling. Tsing ling; clear, 凈 tseng'. Tsing, 清 ,ts'ing. Ts'ing; nice, 妙 miú'. Miáu; subtle, artful, 巧妙 'háu miú'. K'iáu miáu; elegant, 美 'mí. Mei, 美妙 'mí miú'. Mei miáu, 精致 ,tseng chí'. Tsing chí; beautiful, 妙 miú'. Miáu, 美 'mí. Mei, 雅 'ngá. Yá, 精 ,tseng. Tsing, 美麗 'mí laí'. Mei lí; very handsome, 甚美 sham' 'mí. Shin mei; excellent, 妙 miú'. Miáu, 眞正好 ,chan ching' 'hò. Chin ching háu; the fine arts, 六藝 luk ngai'. Luh í, 四術 sz' shut. Sz shuh, 技藝 kí' ngai'. Kí í; amiable, 可愛 'ho oi'. K'o ngái; fine cloth, 幼布 yau' pò'. Yú pú, 細布 sai' pò'. Sí pú, 幼細嘛布 yau' sai' kó' pò', 帶 ,tsz. Tsz; fine silver, 幼細銀 yau' sai' ,ngan. Yú sí yin, 精銀 ,tseng ,ngan. Tsing yin; a fine countenance, 美容 'mí ,yung. Mei yung, 丰容 ,fung ,yung. Fung yung, 丰采 ,fung 'ts'oi. Fung ts'ái; a fine figure, 丰姿 ,fung ,tsz. Fung tsz, 秀氣 sau' hí'. Siú k'í; a fine woman, 美女 'mí 'nü. Mei nü; a fine gentleman, 秀雅嘛人 sau' 'ngá kó' ,yan; a fine scholar, 美士 'mí sz'. Mei sz, 講 ,ngái 吉士 'oi 'oi kat, sz'. Ngái ngái kih sz; fine dress, 講究衣服 'kong kau' ,í fuk, 華麗衣服 ,wá laí' ,í fuk. Hwá lí í fuh, 精致衣服

6 English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation fine art の項
（金沢大学附属図書館蔵）

7 The Imperial Dictionary, English, Technological, and Scientific... art の項（名古屋大学教育発達科学図書室蔵）

したのは、柴田の辞書を参照しつつ、書を入れることで東洋的な理解に傾いているように思われるが、少なくともロブシャイド、柴田の辞書に登載されていたartだけではなく、fine artの記述を参照したことを示している。

柴田が一八六七年から七七年いっぱいまでは外務省で翻訳に従事していたことを考えると、彼の辞書に示されたように、日本で最初に西洋概念に忠実な美術概念を記述する人物がいても、フィラデルフィア万博での事例のようにまだ全体の認識には至っていなかったとせざるを得ない。他方で、柴田より少し後（一八七六年頃）に『米欧回覧実記』を執筆した久米邦武はセーブルの陶磁器に触れた節で、「画図彫刻ノ類人ノ手技ニ出テ精神ヲ寓シ気韻アル工ヲ美術ト云」と述べている。また、他の箇所で美術を「喩ヘハ東洋ニテ、書、画、篆刻ヲ紳士間ニ雅賞スルカ如シ」とも記述している。これは久米がロブシャイドを読んでいて、美術を士大夫階級の芸術趣味と把握していることを示していまいか。また、そうであることを疑わなかったのは彼我の芸術が気韻や雅賞において全く同質であると理解できたからであろう。つまり、日本人は西洋の美術を領域としてではなく、形而上の本義において受容しようとしたのであり、その受け皿となるべき六芸や四術をそのまま当てはめようとしたのだった。久米は博覧会の用語としての美術を承知していたので、その新しい概念は東洋に伝来するジャンルをただ読み替えれば十分だと考えた。それが彼らのもともとの芸術観に合致し、抵抗感がなかったのだと言えよう。さらに、十九世紀後半の日本の知識人にとってはるかに親しみのあった中国における西洋受容を先例として受け入れることはしごく自然だったはずであろう。

このように概念の上でも、ジャンルやヒエラルキーのうえでも、保持してきた価値観と合致すると理解できたがゆえに、明治有司は新しい美術を積極的に受容し、それを国威発揚に伸長できると考えた。このことを一身に担おうとしたのが龍池会の人々である。一八八〇年河瀬秀治を中心に委員五名によって美術の区域を定めたことを鹽田眞が『工芸叢談』第一巻誌上で報告している。鹽田は美術の語がウィーン万博区分目録に始まったことを認めたうえで、「美術ヲ認メテ欧州諸国ノ特ニ有スル所ニシテ本邦ノ曾テ無キ所ト做スアリ、是思ハサルノ甚シキナリ」と断じている。龍池会もこの時には美術を芸術と解しており、彼らの結論は美術は「製形上ノ美術」と「発音上ノ美術」とから成るとし、前者は建築、彫刻、図画であり、後者は音楽、詩歌だと解説している。これを踏まえて、本邦では「製形上ノ美術」は画、書、彫刻、建築となると結論付けた。彼らは柴田ほど西洋の規定に忠実にはなれず、東洋の気韻の表現には欠くことのできない書を省くことはできなかった。一八七七年の内国勧業博覧会も同様の分類であった。一八八三年龍池会は会則でさらに美術の定義を明確にした。即ち、画、書、彫刻、陶磁、七宝、漆器、嵌木、繡織、銅器、建築園冶である。彼らは美術を自らの価値観にさらに近く変容させている。

柴田は一八八七年の改定再版において、fine artの訳語に四術に次いで「美術」を記している。この時点までに発行された辞書のなかで「美術」の訳語を記しているのはこの辞書だけであり、もちろん英華字典にも登載されていないのだから、柴田が「美術」の翻訳に極めて近い立場にあったことをうかがわせるように思う。こうした経緯のなかで一八七二年「美術」の翻訳が行われたのであり、この語が中国、朝鮮、ベトナムなどに受容されたのである。中国では一八九九年に刊行されたロブシャイドの辞書の改訂版『新増華英字典』に初めて「美術」が登場し、今後は逆に日本で作られた概念が中国語彙に受容されたのであった。「美術」概念の受容に際して、西洋―中国―アジア諸国という連関し往還するリンクのなかで形づくられ、伝播していった経緯は伝来するものと受容する側の波紋の一典型ともみえ、その末を我らは依然として泳ぎ渡ろうと格闘しつつあるように思えてならない。

一寸

第六十号　二〇一四年十一月

第六十号目次

新・旧刊案内60　柳瀬正夢年譜Ⅱ　その他　青木　茂　1
竹素材（筍皮）装幀本の話　岩切信一郎　13
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（16）　大谷　芳久　19
近代日本画の構図決定格子（二二）―白隠　金子　一夫　39
未乾素描（5）　丹尾　安典　45
「藝海餘波」から（六）　銅・石版画遺聞55　森　登　55
Fine Artsから美術へ
―アジアにおける概念と語彙の流通　森　仁史　60
戦後本メモ　山田　俊幸　65
『一寸』第一号～第六十号執筆者別総目次　69

新・旧刊案内60　柳瀬正夢年譜Ⅱ　その他

青木　茂

■本紙が滞りなく年末に出れば満十五年の還暦号だという。といっても記念特集号を出そうなどとは誰も言わないし、スポーツマンがある記録を超えると嬉しさを噛みころして「通過点です」などと言うような純粋可憐ぶりもないようである。これは同人の皆んなが老人になって感性が鈍ったからでもあろうし、日常些事にせわしくって年相応に悟っているひまがないからでもあろう。気がつけば僕など、どの集まりに出ても見廻せば最年長らしいので、もうこの会に出るのは恥ずかしいからと思うのだが、そこがボケ老人のゆえんでまた出たりする。出ると、そこに段差があるなと眼で見ながら足がつまづきよろけ、駅であの人にぶつかると思いながらほんとうに突き当ってこちらだけたたらを踏む。『一寸』の僕の書きものもそんな具合だろうと思うが、同人たちは誰もが注意し注文をつけないのを、老人のくせに老人へのいたわりだとしているらしい。それを許されたことと解釈して、またもや駄文を弄することとする。

■本誌前号は柳瀬正夢年譜のそれも一九三二年につい深入りして、僕の見た（見得なかったのも含めて）展覧会図録の年譜とそこに寄せられた文章に限定されて終ったようだった。ために「兄のは分る人にだけ分ってもらえればよいという主義ですね」という評言もいただいたが、といっても「主義」ならば転向するわけにも行かないが、今回は前号に書き洩らした文章を引いて柳瀬を思うこととする。

『柳瀬正夢画集』の一九四八年十月の真理社による新版は、一九二八年の無産者新聞社旧同人による序文も柳瀬本人による一九三〇年一月の叢文閣版例言もそのまま復刻してあるが、巻末にまつやま　ふみお・須山計一